論文の要約

氏　　名：　小林　麻衣子

◆論文題目

知的障害者の意思決定支援における「スパイラル関係性モデル」に関する研究
―相談支援専門員のエンパワメントに基づく意思決定支援プロセスに着目して―

◆要約

序章　問題意識・研究の目的と方法

序章では，問題意識として，知的障害者の意思決定支援において，本人主体の理念を実践の中で具体化するためには，本人の意思を把握するだけではなく，意思の醸成や表出に影響する関係性に着目する必要があることを示した．障害者権利条約や国内の意思決定支援に関する制度整備が進む一方で，先行研究では本人の能力や意思表出に焦点を当てた検討が中心であり，本人・家族・支援者の相互作用や関係性の変容を意思決定支援プロセスとして統合的に説明する理論的枠組みは十分に確立されていないことを指摘した．

これらの課題を踏まえ，本研究では，エンパワメントの視座に基づき，相談支援専門員による知的障害者の意思決定支援プロセスを，本人・親・支援者の関係性の視点から理論化し，関係性の変容によって生じる局面とその構造を明らかにすることを目的とした．さらに，その知見を基盤として「スパイラル関係性モデル」を構築し，相談支援専門員による関係性変容への関与と意思決定支援の展開を理論的に位置づけ，実践的意義を示すことを目指した．

この目的に基づき，①知的障害者の意思は関係性の中でどのように醸成され，何が表出を促すのか，②相談支援専門員は関係性に基づく意思決定支援プロセスにおいてどのような役割を果たすのか，③「スパイラル関係性モデル」は相談支援専門員の実践にどのような視座を与えるのか，という 3 つのリサーチクエスチョンを設定した．

研究方法として質的研究を採用し，文献レビューや概念分析等を通じて理論的枠組みを整理するとともに，軽度知的障害者の住まいや働く場の選択に関する意思決定支援を対象として，本人・親・相談支援専門員への個別インタビューと三者同席のグループインタビューを実施することとした．分析では，質的データ分析法やエピソード記述法等を用い，それぞれの語りと三者の相互作用から，意思決定支援における関係性の構造と変容を検討することとした．また，理論的検討によって生成したモデルを実践の語りに照らして検討・精緻化し，終章で研究全体の知見を統合するという

論文全体の構成を示した．

第 1 章　関係性に基づく意思決定支援プロセスの理論的基盤

第 1 章では，知的障害者の意思決定支援を関係性の視点から捉えるため，その理論的基盤を整理した．エンパワメント理論を主要な理論的基盤とし，フィギュレーション理論を関係性の動態を理解するための補完的視座として位置づけた．これらの理論を踏まえ，意思決定支援を本人の内面における変容だけでなく，家族や支援者，社会的・制度的環境との相互作用の中で展開するプロセスとして捉える立場を明確にした．

さらに，支援者の実践を時間軸で捉えるソーシャルワーク・プロセスと，本人の内面変容を中心とする意思決定支援プロセスを整理するとともに，ミクロ・メゾ・マクロの作用域から，関係性が意思決定支援に及ぼす影響を検討した．そのうえで，意思決定支援に関するスコーピングレビューと質的データ分析法を用いて先行研究を分析し，「意思の芽生え」「意思の醸成」「意思の揺らぎ」「意思の表出」「意思の交錯」「意思の実現」の 6 カテゴリーからなるプロセスの試論を提示した．これらの検討を通じて，意思決定支援を関係性の変容と相互作用によって展開する動態的なプロセスとして捉える理論的枠組みを示した．

第 2 章　相談支援専門員の役割と課題 ―関係性の視点から―

第 2 章では，相談支援事業の制度的変遷と相談支援専門員の役割を整理し，法定研修における意思決定支援の位置づけを検討した．さらに，先行研究のレビューを通じて，相談支援専門員による意思決定支援の実践課題を，関係性の視点から分析した．

その結果，意思決定支援の課題は，本人と相談支援専門員との直接的な相互作用にとどまらず，親をはじめとする家族との関係，関係機関との協働，制度や社会資源との接続など，複数の関係性にまたがっていることが示された．これらの課題をミクロ・メゾ・マクロの構造から整理し，相談支援専門員には，本人主体の原則を維持しながら，家族や関係機関との関係を調整し，制度や資源を活用できるよう働きかける役割が求められることを論じた．これらの検討を通じて，意思決定支援を本人への個別的な働きかけだけでなく，多層的な関係性の調整を含む実践として捉える視点を提示した．

第 3 章　知的障害者の親子関係支援の構造的理解と展開

第 3 章では，成人期以降も親と同居する知的障害者が多く，親の意向が本人の意思の醸成や生活選択に影響するという状況を踏まえ，「親子関係支援」の概念と構成要素を明らかにすることを目的とした．Rodgers の概念分析法を用い，関連文献を対象に，親子関係支援の先行要件・属性・帰結を整理した．

分析を通じて，知的障害者の意思決定支援における親子関係は，本人の自立や社会参加に関わるとともに，親の思いや意向，相談支援専門員の介入が交錯する複雑な構造を有することが示された．また，関係性のバランスによって本人の意思の醸成や表出のあり方が左右される一方，支援者の関与によって関係性が生成・変容・再編される可能性が示された．これらの知見は，親子関係を固定的なものとして捉えるのではなく，意思決定支援のプロセスで変容しうる関係性として理解する必要性を示すものであり，第 4 章における「スパイラル関係性モデル」の理論生成の基盤となった．

第 4 章　関係性の動態と局面の特徴 —「スパイラル関係性モデル」理論生成—

第 4 章では，第 1 章から第 3 章までの理論的検討を踏まえ，知的障害者の意思決定支援における本人・親・支援者の関係性を整理し，その動態的構造を説明する「スパイラル関係性モデル」を生成した．まず，関係性の類型化に関する先行研究を検討し，本人と親，本人と支援者，親と支援者という三者間の関係性を分析する枠組みを設定した．次に，それぞれの関係性における特徴を類型化し，その対比構造をもとに，「誘導」「適応」「対立」「協働」の 4 つの関係性レイヤーを導出した．

さらに，これらのレイヤーと第 1 章で提示した意思決定支援プロセスの 6 カテゴリーとの対応関係を整理し，「意思の醸成」と「意思の表出」は，各レイヤーを横断するプロセスとして位置づけた．その結果，意思決定支援は，あらかじめ定められた段階を一方向に進むものではなく，本人・親・相談支援専門員の関係性が生成・変容・再編される中で展開する動態的なプロセスとして捉えられた．生成したモデルについては，第 5 章から第 8 章において，それぞれの立場からの語りと三者の相互作用に照らして検討・精緻化するための理論的枠組みとして位置づけた．

第 5 章　本人の語りにみる意思の醸成プロセス

第 5 章では，軽度知的障害者 3 名へのインタビューを通じて，住まいや働く場などの重要な選択において，意思がどのように醸成されるのかを分析した．その結果，意思の醸成プロセスは，「支援非意識」「関係性影響下」「葛藤表出」「協働安定」の 4 つの局面に整理された．本人の意思は，内発的動機に基づく経験や試行錯誤を通じて育まれる一方，親の意向や周囲への配慮によって表出が抑制される場合もみられた．また，相談支援専門員との安心できる対話や体験機会は，本人が自らの思いを整理し，意思を表出することを支えていた．これらの局面は固定的な段階ではなく，関係性や場の条件に応じて変容することが示された．さらに，関係性レイヤーとの照合から，本人の意思の醸成・表出には，親や周囲との関係性の調整が重要であることが示唆された．

第 6 章　親の語りにみる意思決定支援プロセス

第 6 章では，軽度知的障害者の親 5 名への半構造化インタビューをもとに，家族エンパワメント理論の視点から，意思決定支援における親の経験と認識変容のプロセスを分析した．分析の結果，【専門家の介入】【親自身の支え】【抑圧する経験】【親主導の意思決定支援】【自己犠牲的な人生】【親が願う社会変革】【子を肯定する力】【対等な親子関係を目指す行動力】の 8 つのカテゴリーが抽出された．これらの経験は一定の順序で進むのではなく，親自身の葛藤や気づき，支援者との関係性の変容を伴いながら展開していた．さらに，これらのカテゴリーを家族エンパワメント理論の「リソース」「気づきと動機」「問題解決力」の 3 側面から整理し，親自身の支えや相談支援専門員の介入が，親の内省や本人の力の再認識を促す契機となることを捉えた．こうした経験を通して，親は保護的な関わりや本人の意思を制限してきたことを振り返り，本人の力を肯定的に捉え直すとともに，自己決定を尊重し，対等な親子関係を目指す変容がみられた．また，これらの知見を「スパイラル関係性モデル」と照合し，親の保護的な価値観や親自身による関係性の調整，協働に向けた役割の変容という観点から，モデルとの関連を考察した．

第 7 章　相談支援専門員の語りにみる意思決定支援プロセス

第 7 章では，相談支援専門員 7 名への半構造化面接調査をもとに，Gutierrez のエンパワメント理論の視点から，意思決定支援における支援の構造と相談支援専門員の役割を検討した．分析の結果，【意思決定の前提となる環境的支援】【本人の意思表出のための関係づくり】【親の認識が変化し協働へ向かうプロセス】【本人中心の協働をつくる支援】【責任をめぐる関与の揺れ】【意思決定支援の実践とともに成熟する専門性】の 6 つのカテゴリーが生成された．これらのカテゴリーが示すプロセスは，固定的な段階を示すものではなく，本人・親・相談支援専門員の関係性の揺れに応じて，相互に影響しながら展開することが示された．また，相談支援専門員は，本人と親の意向の違いや責任をめぐる葛藤に直面しながら，自らの関与を問い直し，関係性を調整していた．こうした実践は，成功を達成として，失敗を学びとして意味づけ直す「経験の価値化」，合意できる範囲で役割と責任を具体化する「小さな合意形成」，場・人・制度などを柔軟に組み替える「条件再編シフト」という 3 つの働きからなる「協働変容的役割」として整理された．さらに，相談支援専門員の語りを「スパイラル関係性モデル」と照合し，意思決定支援が関係性の揺れや再編を伴いながら展開する動態的なプロセスであることを確認した．

第 8 章　三者同席の語りにおける意思決定支援プロセスの動態

第 8 章では，本人・親・相談支援専門員の三者同席場面における語りを対象に，エピソード記述法およびメタ意味の視点から分析し，発話内容や語りの順序，沈黙・視線などの非言語的応答に表れる関係性の変容を検討した．その結果，本人の語りや親・相談支援専門員の関与のあり方は，相互の応答を通じて変容し，三者の関係性が

その場で動態的に展開する様相が捉えられた．また，「スパイラル関係性モデル」との照合により，誘導・適応・対立・協働の各レイヤーは固定的に現れるのではなく，複数の特徴が重なり合いながら変容することが示された．さらに，意思の醸成・表出は，関係性の変容と相互に影響しながら展開しており，相談支援専門員の「協働変容的役割」が，三者の関係性の調整と再編を支えていることが示された．これらの結果を踏まえ，第 5 章から第 7 章までの個別の語りの分析で捉えられた関係性の構造を，三者の相互作用が生じる場面から具体的に捉え直し，「スパイラル関係性モデル」の動態的な構造と実践的意義を検討した．

終章　「スパイラル関係性モデル」の総合的考察

終章では，第 5 章から第 8 章までの分析結果を総合的に照合し，「スパイラル関係性モデル」の妥当性と理論的含意を検討した．その結果，知的障害者の意思決定支援は，本人の意思の醸成プロセスと，親の認識や関わり方の変容，相談支援専門員による関係性や支援条件の調整とが相互に関わりながら展開する動態的なプロセスとして理解できることが明らかになった．また，理論生成段階のモデルでは十分に捉えきれなかった関係性の複層性・同時性を明らかにし，誘導・適応・対立・協働の各レイヤーが重なり合い，揺らぎや可逆性を伴って変容する構造として最終モデルを精緻化した．さらに，「意思の醸成」と「意思の表出」が関係性の変容と相互に影響しながら展開すること，相談支援専門員の協働変容的役割がそのプロセスを支えることを明らかにした．

本研究の意義は，意思決定支援を個人の能力や直線的な段階論に還元せず，本人・親・相談支援専門員の関係性の中で展開する動態的なプロセスとして理論化した点にある．特に，「意思の醸成」と「意思の表出」，および「誘導」「適応」「対立」「協働」の関係性レイヤーとの相互作用に着目し，「スパイラル関係性モデル」を構築したことは，意思決定支援を関係性の変容とともに理解するための独自の理論的視座を提示したものである．

また，4 つの関係性レイヤーを支援場面の固定的な段階ではなく，関係性の特徴を理解するための分析概念として整理し，実際の支援場面では複数のレイヤーに対応する特徴が重なりながら現れることを示した．さらに，相談支援専門員が本人・親・相談支援専門員の関係性や支援条件に働きかけ，関係性の再編を支える「協働変容的役割」を担うことを示した．

本研究の理論的・実践的意義は，知的障害者の意思決定支援における関係性の動態的な構造を理論化するとともに，その実践において相談支援専門員が担う協働変容的役割を示した点にある．